

【詩集】 凧

八百板 華菜

黙座

かの縁遠い崖の憤りを
今は誰が聴く
窒息さす靄での
わたしの残響は死んだか

風船

裂けぬとおもう
張ってゆくのをしている

遠くなってゆく人へ

路傍の小石三つ手にとってください
わたしの瞳の色を忘れましたら一つ落として
わたしの表情を思い描けなくなりましたらもう一つ
あとの一つはどうかポケットに

一日

竹氷る山中、葉影黒く天に文様を打ち、

その狭間、ただただ瑠璃。

自らの足踏み、耳に障り、

鼻となり静寂を穢さず奥へ行ければと、思う。

鳴かずに居た鳥が発ち、

貼り付いていた白蛾が、散る枯葉のように舞う。

行くところ帰るところ、前方。

朝の寢床にて

風鈴の花を愛でる人の横顔に差す哀惜

離れる

あなたの家のかたわらで

揺れていた花は

染まった頬の色

寒かったその日

花は

いじわるする甘ずっぱさを知る

幼な子に似た初春のかぜにも

ほほ笑みながら

かげで涙するひとの

日暮れの暗い脆さを匂わせて

透けそうな花びらを

ふるわせていた

この道をもう

通るまいなと

振り返り

花の横顔に

よそおった無関心を見た

かなしくきたないわたしを知った

今日

数を知らないもぐらたちのうた

吹かれ散る感情を抱きしめる

光をうらなう女たちのうた

途絶えてくれるな

潤いとなりで

ほほえんでいてください

毎日のこと

アルマジロが笑いながらアスファルトを駆けてゆく
それを転がりながら追うのは湯であがったカリフラワー
二人があんまり愉快そうに走るので
通りかかる人はみな笑顔

台風が来て街中にモズクが散乱
タンチョウとゴイサギが群れてきて
くちばしを半開きにしてにやけている
酒盛りをはじめた

となりの席の男の子は机の引き出しにホタルイカを飼っている
けど先生の職員室の引き出しの中にはウシガエルがいることを知っている
わたしはロッカーでニシンを飼っている
ニシンはひそかに蚊を飼っている

鉄棒の競技でいつも一位を争うのはエノキダケとハツカダイコンの芽で
不眠の世界記録保持者は石英
彼らは朝よく一緒にジョギングをしている
そのあとレストランで蜂蜜を舐めて語らっている

おはよう
おやすみ
おはよう
おやすみ
おやすみ